



HNMF

ニュースリリース

2018年5月29日
公益財団法人野口英世記念会

野口英世博士の死後、解剖した時の観察記録「剖検所見記録」贈呈式開催のお知らせ

野口英世博士の死後、同僚のヤング博士によって解剖が行われました。その時の記録「剖検所見記録」※1は、ガーナ共和国の野口記念医学研究所※2に保管されていました。この度、英世が亡くなって90年の節目の年に、この「剖検所見記録」が当会へ寄贈される運びとなりました。つきましては、2018年6月9日に野口英世至誠館（野口英世記念館隣接）において贈呈式を開催いたします。贈呈された「剖検所見記録」は、贈呈式後に記念館展示室にて一般公開をいたします。90年もの時をガーナ共和国と日本の両国での英世を大切に想う人々が紡いできた縁と、当時の生々しい状況を物語る貴重な資料です。また、贈呈式を記念してシンポジウム※3を開催いたします。※1-3 別紙参照

○「野口英世博士剖検所見記録」贈呈式

日にち：平成30年6月9日（土）

時間：（開場）9：30～（贈呈式）10：00～11：00

会場：野口英世至誠館

（福島県耶麻郡猪苗代町大字三ツ和字前田 81）

（<http://www.noguchihideyo.or.jp/about/access.html>）

出席予定者：

ガーナ大学野口記念医学研究所

Abraham Kwabena ANANG 所長

ガーナ大学

Patrick F. Ayeh-Kumi 副学長

在ガーナ日本大使館

姫野 勉 特命全権大使

駐日ガーナ共和国大使館

Frank OKYERE 次期大使

猪苗代町

前後 公 町長

公益財団法人野口英世記念会

八子弥寿男理事長

内容：贈呈、VTR「黄熱病との闘い」上映

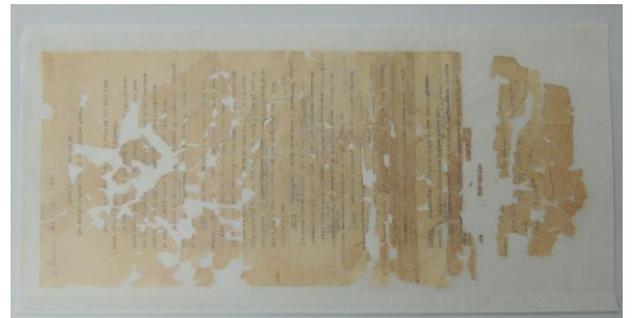
※贈呈式後、一般公開（野口英世記念館展示室内）

○ 記念シンポジウム「感染症と免疫」

日時：同日 13：00～（開場 12：30～）

会場：同会場

講演者：東京大学医科学研究所 清野 宏教授



剖検所見記録



英世(○内)を囲むアクラの研究者と作業員達

問合せ先：公益財団法人野口英世記念会 総務課主任 野口 由紀子

Tel 0242-85-7867 Fax 0242-23-7122 E-mail y-noguchi@noguchihideyo.or.jp

〒969-3284 福島県耶麻郡猪苗代町大字三ツ和字前田 81

「野口英世博士剖検所見記録」について

公益財団法人野口英世記念会

平成 30 年 5 月 29 日

1975 年頃：福島県立医科大学（以下福島医大）・星島啓一郎教授が、アクラのガーナ大学医学部に蔵している「野口英世博士剖検所見記録」のコピーを、現地にて入手した。（野口英世の遺体は死亡した 1928 年 5 月 21 日に、イギリス人病理学者 Dr. W. A. Young によって病理解剖された）

1979 年：ガーナ共和国アクラに野口記念医学研究所が完成（JICA の医療協力プロジェクト活動の一環、福島医大が担当）。このプロジェクトの調査団が、「野口英世博士剖検所見記録」がアクラのコレブ病院に保存されていることを確認した。

1997 年 5 月 5 日付の朝日新聞：「野口英世博士剖検所見記録」を含む全 454 ページの「剖検所見記録ノート（1927～1928）」の存在を報道（JICA のプロジェクト・リーダー、神谷敏也博士があまりの惨状から「一日も早い修復」を熱望と報道）。

野口英世記念会は、可能な限り修復することを役員会で決定し、その旨、駐日ガーナ大使館に申し出た。

1998 年 4 月 10 日：駐日ガーナ大使から「剖検所見記録ノート（1927～1928）」の修復依頼の公文書が記念会に届いた。

1998 年 6 月 25 日：ガーナ大使館から「剖検所見記録ノート（1927～1928）」が記念会に届いた。「野口英世博士剖検所見記録」のページは、質の悪い紙にタイプライターで印字されていて、「剖検所見記録ノート」の 122 ページに貼付けられていた。文書が「剖検所見記録ノート（1927～1928）」より長いため紙面の下部を

折り返してあった。

1998年11月18日：国立文化財研究所・増田勝彦修復技術部長ら専門家6名が修復について協議した。

1999年12月7日：修復完了。

1999年12月22日：ガーナ大使館で、ガーナ大使に修復原本を手渡した。

2000年6月28日：ガーナ大使から公式受領書が届いた。しかし、その後、所在不明となった。

2010年7月15日：所在不明であった「剖検所見記録ノート（1927～1928）」が、ガーナ大学内にある野口記念医学研究所の金庫の中にあることを、片上慶一駐ガーナ大使から、連絡があった。しかしその後、所在不明となった。

2017年11月14日～22日：2017年11月16日～17日にガーナのアクラで開催された「野口英世来ガーナ90周年記念シンポジウム」に参加した当記念会の野口由紀子総務課主任が、在ガーナ日本大使館一等書記(医務官)・遠海重裕博士、野口記念医学研究所 Abraham Kwabena ANANG 所長、および太田伸生・東京医科歯科大学名誉教授の協力を得て、「剖検所見記録ノート（1927～1928）」の所在の再確認を試みたが、滞在期間中に確認できなかった。

2017年11月25日：野口記念医学研究所事務長室の金庫の中に「剖検所見記録ノート（1927～1928）」が存在することを、野口医学研究所において研究をしている東京医科歯科大学の大橋光子・特任准教授、林隆也・特任講師、松尾真由美事務員らが確認した。

2017年12月～2018年3月：在ガーナ共和国日本大使館に、「剖検所見記録ノート（1927～1928）」を猪苗代の野口英世記念館に寄託（贈呈）していただくべく、野口記念医学研究所およびガーナ大学との折衝をお願いした。

2018年5月22日：野口記念医学研究所において「剖検所見記録ノート（1927～1928）」のうち、「野口英世博士剖検所見記録」のページが、公益財団法人野口英世記念会の代表者（野口由紀子）に手渡された（写真）。



資料の受渡

左 野口研 Abraham Kwabena ANANG 所長

右 当会 野口由紀子主任

2018年6月9日：猪苗代の野口英世記念館において、野口記念医学研究所 Abraham Kwabena ANANG 所長、ガーナ大学 Patrick F. Ayeh-Kumi 副学長を招聘し、「野口英世博士剖検所見記録」の贈呈式を行うこととなった。

ガーナに残した野口英世の足跡に学ぶ

東京医科歯科大学 太田 伸生

はじめに

私は日本が支援してガーナに設立された野口記念医学研究所（野口研）において日本とガーナの医学領域の研究協力プロジェクトに、この15年来かかわってきました。遠いアフリカの地に日本人研究者の名前を冠した研究所が存在することには日本人として誇らしい気持ちが湧くものです。

私も多くの日本人と同様に幼少期から野口英世の伝記に接し、野口英世がガーナで行った活動についてそれなりの理解をしていたつもりでした。野口英世に関して、多くの日本人は幼少期に負ったやけどによる左手のハンディキャップを克服して医学研究者として大成したこと、英世を育て上げた母・シカとの終生愛をわらぬ親子愛などと並んで、ガーナでの黄熱病の研究途上で客死したことをよく知っています。しかし、野口英世の51歳6か月の生涯の中で、ガーナでの滞在は半年間に過ぎません。野口にとっては数多い「出張」の、ついに過ぎなかったのです。細菌学者・野口英世はガーナ渡航以前の輝かしい業績によって、すでに「功成り名を遂げた」存在でした。野口英世にとってガーナでの滞在とは何だったのか、日本人にとっては、なぜガーナの野口にかくも熱い想いを抱くのか、いろいろと考えさせられることが多いように感じています。

私は野口研で仕事をする機会を得て、野口英世という人物には一層深い関心と敬意を持つようになりました。明治維新から20世紀初頭にかけて、日本の各界の

エリートたちがヨーロッパに学んで帰朝し、日本の発展に寄与することを使命と任じていた中で、野口英世は米国での成功後も日本に拠点を戻すことなく、当時日本人の誰も足を踏み入れたことがない西アフリカの地で欧米人チームを率いたリーダーとして活動したことは、その結末が悲劇的であったとしても快挙でした。野口英世が人生の最後の壮絶な6か月間をガーナで過ごしたことは、それが野口には必然でさえあったのだと感じられます。この稿では、ガーナにおいて野口英世が残した足跡を俯瞰し、野口英世がガーナに遺した私たち日本人へのメッセージについて考えてみたいと思います。

ガーナという国

ガーナは西アフリカのギニア湾岸に位置し、南部は熱帯雨林気候、北部はサバナ気候帯に属します。日本の約2/3の国土面積に日本の人口の1/4弱の人口が生活しています。首都はアクラで、広域都市圏を含めた人口は230万人です。日本からは遠隔の地であり、中東経

由が最短の航空便ですが、それでも日本からほぼ24時間を要します。産業は農業、鉱業など一次産品が主要なもので、特にチョコレート原料であるカカオの生産は世界的に有名です。果菜子メーカーの商品名に使われるなど日本でのガーナの知名度はかなり浸透していると、言ってもいいでしょう。ガーナにも国産チョコレートがありますが、乳脂肪含有率が低いため日本人の舌にはパサつき感が強いというのが正直な感想ですが。

ガーナはかつて英領ゴールドコーストと呼ばれていました。ガーナは1957年にサハラ以南のアフリカで最初に独立を果たしました。野口英世がガーナに滞在したのは昭和初期ですから、まだ独立する前の時代でした。その後度々政変はありましたが、比較的安定した国家運営が続き、僅差の大統領選挙結果をも国民が冷静に受諾するなど、アフリカにあって稀有なほどに政治的に安定した国家と言えます。そのために、第2次大戦後の西アフリカにおける日本の国際協力支援の拠点として日本がガーナを重視することになったのですが、野口英世が日本人の心に播いたガーナへの親近感も大



ガーナ大学レゴンキャンパスに
1979年に設置された野口記念医学研究所

きな理山であったと思います。近年の 아프리카諸国発展の例にもれず首都アクラ市街の近代化は目を見張るものがありますが、海岸沿いの旧市街に限れば野口英世が滞在した頃の面影を今日でも色濃く残しています。



1927年に野口英世が上陸した
アクラ市内ジョージタウンの今日の風景

野口英世の ガーナ派遣の経緯

さて、野口英世のガーナとの関りを振り返ってみましょう。ガーナが野口英世の人生終焉の地となったのは日本人に大きなインパクトでした。ガーナでの野口の死には憶測も含む様々な説があり、多くの伝記で触れられているばかりでなく、ミステリー仕立ての読み物も出版されていますから、ここでは筆者の任とします。米岡ロックフェラー研究所の花形研究者であった彼が何故ガーナまで赴く必要があったのか、ガーナではどのような日々であったのかだけを論じてみよ

うと思います。

1920年前後はロックフェラー研究所が国内外の流行病対策に積極的に乗り出す時代で、その中で野口英世は文字通り八面六臂の活躍でした。南米の黄熱オロヤ熱など、現場に赴いた野口は短時間うちに解決に導き、名探偵による事件解決を彷彿とさせるものでした。一病原体ハンターとして野口は自信に溢れ、活動の成功を通じてその名声はますます高まっていきました。やがて、1924年になると西アフリカで黄熱病の流行が起きます。ロックフェラー研究所は現在のナイジェリアのラゴスに研究所を設置して病原体分離とワクチン開発の活動拠点とし、アクラの英国政府機関も加えた体制で取り組みました。南米での経験から、野口は西アフリカの黄熱も比較的短時間で解決できると考えていたように、妻メリーにも滞在は3か月の予定と伝えてニューヨークを発っています。

さて、黄熱病は今日でこそ蚊が媒介するウイルス感染症であることは誰もが知ることですが、当時は病原体が不明でした。黄熱とは黄痘を伴うのでこの名前があります。野口が南米で対策にあたった熱性疾患も黄痘を伴い、「黄熱」と呼ばれました。それが真の黄熱なのか、類似の発熱疾患だったのかはわかりませんが、南米の「黄熱」患者から分離した細菌（スピロヘータ）から作ったワクチンは現地では確かに効果を示しました。野

口英世は西アフリカの「黄熱」も同じだと考え、その流行対策に自信を持っていったのですが、ラゴスの研究室から彼の考えを裏付ける報告が届きません。そこで野口は業を煮やして自ら現地に入って調査することを決心しました。ロックフェラー研究所長のフレクスナーは研究所の大切なエースをアフリカに派遣することを選びましたが、結局は野口の粘りの前に許可する決定を下しました。

ガーナでの 野口英世の研究のロケ

野口がアクラに到着したのは1927年11月のことです。早速に実験室の整備から取りかかりました。野口英世の実験スタイルは独特のもので、野口が一番やりやすい実験環境を求めましたから、100%野口色の実験室となりました。当時の実験室の建物がアクラ市内レゴン地区に残っています。



アクラ市内コレブ地区に残されている
野口英世が使用した研究室の外観
(現在でも学生教育に使用されている)

今日でも医療技術者学校の実験室として利用されている現役の施設です。

野口がアクラで扱った研究アプローチは、患者の血液などを動物に投与して発病を確認することでした。感染症の病因を確認するための「コッホの条件」に沿った方法論でした。野口はアカゲザルを使って動物実験に取り組みました。アカゲザルは南/東アジアに棲息することから、当時のヨーロッパの動物商がアジアからどのように大量のアカゲザルを調達したのか、その苦勞がしのげられます。陸揚げされたアカゲザルがトラックに満載され連日研究室に運び込まれた光景は壯観であったことでしょう。諸説がありますが、半年に満たない期間に野口は合計900頭ものアカゲザルを実験に使ったとも「わけています。他人の実験結果を信用しないという野口の研究ポリシーもあつたようですが、これほど多数のサルを用いた実験研究を彼一人で行うことはできません。連日ほぼ徹夜でサルの解剖を行っていたようです。半年でこれだけ多数のサルを解剖するとすると、休日返上でも1口に5頭のペースで進めないと計算が合いません。ともかく猛烈実験の結果、黄熱の病原体を5株確認したと報告しています。ただ、それが野口の仮説を万人に納得させるものではなかったようですが。

誰にもわからない

野口のアカラ滞在は南米派遣の時とは違って決してハッピーではありませんでした。研究遂行上の様々なストレスがあったことや、絶対権威者であった野口の研究仮説に対する異論も多くなってきたことも彼には不快だったことでしょう。ニューヨークでの研究費は青木井であつたものが、アカラゲザルの調達ひとつをとつてもラゴスの会計担当者ややりあつて居るのは現在の大学の会計処理とも重なる、少し共感を覚えます。

黄熱の本態について医学的に解明が進まない中、感染症の領域では新しい動きが起こつてきました。濾過性病原体、即ちウイルスの存在です。しかし、ウイルスは光学顕微鏡では見えませんが、そもそもウイルス粒子結晶化の成功は野口の死から7年後の事です。細菌学者である野口はスピロヘータが病原体と推定していましたが、ラゴスの研究室と野口が率いるアカラの研究室でデータ検証に意見の食い違いが次第に大きくなっていきま

ました。そしてそろそろニューヨークに戻ろうと考えていた矢先、1928年5月になつて病を得て、発病後10日ほどを経てアカラで亡くなりました。野口の病理解剖標本はロンドンに送られて、黄熱であることが確認されたとされています。最期の言葉と伝えられるのが有名な「ぼくにはどうもわからない」でした。そのこともあつて、野口英世は黄熱病の病原体に関する誤った確信に縛られ、ガーナで意味のない活動に終始したとい

う後世の批判を呼ぶことにもなります。では野口は本当に西アフリカの黄熱の病原体がわからないままじくなつたのでしょうか。野口も当然ながら「濾過性病原体」について知っていました。そして、野口が亡くなる直前になつて、以下のような重要なレポートをロックフェラー研究所長に発しているのです。その内容は「南米の黄熱とは異なつた病原体によつて起こること」および「濾過器をすり抜ける病原体である」ということで、それを野口は「Funny bag (ヘンな奴)」、と呼びました。その事実からすると、野口英世にも少しガーナでの時間が許されたならば、新発見を得ることもできたのではないかと思われるのです。「ぼくにはそれが何か、まだ」どうもわからない」というのが野口の本当の言葉ではなかつたかと想像するのですが、こればかりは「私にもわからない」です。

野口英世を慕う人々(その一)

1928年に野口英世が世を去り、間もなく90年になりますので、ガーナでの野口の生き証人もいなくなりました。しかし、日本からガーナへの医学研究協力支援が始まったのは1965年頃です。で、当時はまだ野口の助手を務めたガーナスタッフが存命でした。その人たちから野口について聞き取りを行った記録が少ないながらも残っています。



野口英世の実験助手を務めて
1996年に亡くなられた A. William 氏
(写真:本多憲児、「甦る野口英世の心より」による)

題解明のために野口は非常に重大な貢献を果たしてきた。彼の真理を求めむむきな献身的活躍、誠実さ、人類の安寧のために研究領域を越えた追求心をもって研究を続けた野口の功績を大切に心の中にもち続けたい」とあることから想像できます。野口が如何に使命感に燃えてガーナに赴いたか、またアフリカの難病の解決を希求する態度であつたかについては臆がなかつたと思います。野口はすでに「功成り名を遂げた」世界的研究者でした。他人を蹴落としても積むべき業績など最早ありませんから、「病気で苦しむアフリカの人たちの役に立ちたい」という気持ちで勝つていたら私も信じます。

野口英世を慕う人々(その二)

日本の感染症研究者にとつてガーナは聖地のようなものです。野口英世という傑物が命を賭して成し遂げようとしたことを思うと、その遺志の一部でも引き継ぎたいと思うものです。実際に、日本がガーナの医学研究の支援に取り組んだ背景には野口英世の存在が確実にあります。1965年に始まった日本-ガーナ医学研究協力事業は内容の変遷を伴いつつも今日まで途切れることなく続いてきたのは「野口英世のガーナ」についての日本人研究者の熱意があつたからです。

野口英世が福島県出身であることが

助手を務めたガーナ人、A. William 氏は「野口英世先生は黄熱病に苦しめられて居る人々を救いたいと申され、また他の伝染性疾患や熱帯特有の病気から、熱帯地方に住む人々を何とか守りたいと口ぐせのように話されてました」と証言しています。これが外交辞令とは言えないと思うのは、野口の米国の仲間からの哀悼文にも「黄熱病というこの重大な問

ら、初めに協力に取り組んだのは本多憲児教授が率いた福島県立医大チームでした。



今日の日本とガーナの医学研究協力の礎を築かれた
福島県立医科大・本多 憲児先生

福島県立医大が取り組んだのは野口英世の研究室に隣接するガーナ大学コレブ教育病院の強化事業でした。ウイルス学を含む感染症学、栄養学、免疫学などの研究支援から始められました。それらの実績に立って、1979年にアクラ市北郊のガーナ大学レゴンキャンパスに日本の無償資金協力によって野口研が設置され今日に至っています。研究所の名称に野口英世を冠したのはガーナ政府から強い希望もあったと記録に残っています。野口英世の精神を汲んだ研究機関がアクラの地に設置されたことには日本人としても深い感動と希望を与えることでした。設置以降今日まで野口研は西アフリ

カ地域随一の實力と設備を備えた医学研究機関としてその名前を知られ、今日では欧米の研究チームが野口研を舞台として様々な共同研究プロジェクトを実施しています。

野口研が設立された以降は、協力事業の多様化に伴って、福島県立医大単独事業からオールジャパンのプロジェクトチームの構成となり、基礎研究からガーナ国民の健康推進事業まで、その協力内容は実に多彩なものとして発展してきました。そして私もその一員として加わることになりました。野口研の幹部研究者には日本で学位を取得した人も多く、このような人的交流を基礎に今後の研究交流発展が一層期待されるどころです。

21世紀の野口英世をめざして

2014年の西アフリカでは野口英世がガーナに赴いた当時と似たような状況が再現されました。西アフリカは、か国のエボラ出血熱の流行です。病原体の単離や予防・治療法が確立しない感染症は常に人類の脅威となります。90年前の西アフリカの黄熱と現代のエボラ出血熱の問題は、流行封じ込めという最終目標が達成できていないという意味で、本質的に変わることがないといつてよいでしょう。流行が続く三か国には欧米のさまざまな医療・研究チームが入り、身の危険に代えて人々の健康と安全を口指す活動

を行っています。彼らの活動を支える基本的な考え方は、実は野口英世がガーナで示したものと何ら変わることがありません。医療ミッションのメンバーの中に感染者が出て、生命を犠牲にする例は今回のエボラ出血熱だけでなく、今世紀初頭のSARSの時に報じられました。それらを見聞するにつけて、感染症研究者としての野口英世が、医学研究者として如何に普遍的な研究哲学の持ち主であったかということ強く感じます。さらに、野口英世ほどの人物研究者がそれを実践したことに驚かされるのです。

日本はそのガーナの地に野口研を設置しました。野口研を窓口に、今日もガーナとの医学研究の協力体制を維持しています。野口研は日本にとって感染症研究の大切な前線窓口です。その野口研の設置に尽力されたのが野口英世の遺志を汲んだ福島県立医大の本多憲児教授でした。本多先生は2013年に生涯を閉じられましたが、先生のご遺志で、遺骨の一部が野口研の中庭に埋葬されています。野口研では全職員による追悼行事が盛大に執り行われました。同じ中庭には、野口研を設置した際に、日本とガーナの協力の象徴として植樹された火燭樹が大きな枝を伸ばしています。

野口英世が思いを残して去ったガーナには、今日なお、これら野口英世の意思を継承するものが根付いていることを強く感じています。

最近では、日本の若い学生、研究者が野口研を訪問するようになりました。彼らをガーナに引き付けるものとは、間違いなく野口英世だと思います。野口英世のガーナでの滞在はわずかに半年間だけでしたが、野口が播いた種は90年間にわたって、またこれからも日本人の心に訴え、21世紀の新たな野口英世を彼の地に導いてくれるものと思われてなりません。



野口研中庭に植樹された日本とガーナの医学交流の象徴である火燭樹



**Noguchi Hideyo Memorial Museum Symposium
on Infectious Disease and Immunity
on the occasion of the formal presentation ceremony of
Dr. Hideyo Noguchi's autopsy record from Ghana to Japan**

Date: 13:00- 17:35, June 9th, 2018

**Location: Noguchi Hideyo Memorial Museum Lecture Hall
Inawashiro, Fukushima, Japan**

13:00-13:05	Opening Remarks
13:05-13:10	Welcome Remarks Dr. Yoshifumi Takeda, Noguchi Hideyo Memorial Museum
13:10-13:40	Special Lecture I "Yellow Fever in the context of global health challenges" Professor Kwabena Mante Bosompem Director, Noguchi Memorial Institute for Medical Science
13:40-14:10	"Infectious Disease Surveillance with Operational Linkage to Basic Research in Ghana" Dr. Kiyosu Taniguchi, National Mie Hospital and Mie University
14:10-14:40	"Virus, Host and Microbiome Interaction in HIV Infection" Dr. Tetsuro Matano, National Institute of Infectious Diseases
14:40-15:10	Special Lecture II "Regulation of Intestinal Homeostasis by Microbiota" Prof. Kiyoshi Takeda, Osaka University
15:10-15:30	Coffee Break
15:30-16:00	"Metagenome Analysis; Great Impact on the Next-Generation Surveillance System for Diarrheal and HIV Diseases" Prof. Hiroshi Kiyono, Chiba University and the University of Tokyo
16:30-17:00	"Transcriptional Regulation of Plasmodium parasites: Functional Analysis of AP2 Transcription Factors" Prof. Shiro Iwanaga, Tokyo Medical and Dental University
17:00-17:30	Special Lecture III "Ebola virus disease: An expanding threat to global health?" Prof. Patrick F. Ayeh-Kumi Provost, College of Health Sciences University of Ghana
17:30-17:35	Closing Remark